

JVS APEX

Sustainability Report 2014

環境・社会報告書



アペックスグループ

会社概要

(2014年3月31日現在)

社名 株式会社アベックス
本社 〒474-0053 愛知県大府市柁山町2丁目418番地
設立 昭和38年(1963年)2月
資本金 8,400万円
売上高 620億円*(平成25年度実績)
社員数 1,700名*
営業拠点 全国主要都市99ヶ所*(平成25年12月末)
*株式会社アベックス西日本を含みます。

経営理念

常に改善・改革を繰り返し、最高の商品とサービスを提供する
正当な利益を創り、働く仲間の成長と社会への責任を果たす
環境保全活動に最善を尽くし、地球環境との調和を図る

事業内容

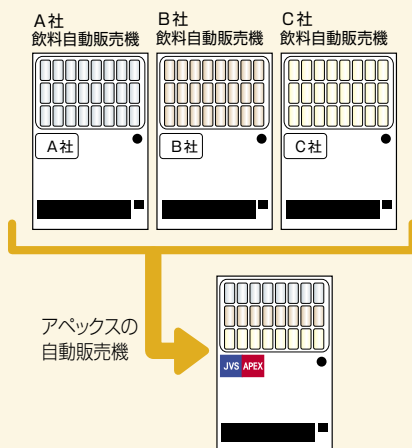
MEMO

アベックスは 専業オペレーターです。

“自動販売機オペレーター”とは、自動販売機を保有してさまざまな場所に設置することによって、中身商品やサービスを販売・提供する業態のこと。オペレーターには、これらの業務を専門的に行う「専業オペレーター」と、飲料メーカーなどがオペレートも兼ねて行う「兼業オペレーター」があり、アベックスは「専業オペレーター」にあたります。

アベックスは専業オペレーターのため、品揃えが特定メーカーに偏ることがありません。このため、売れ筋商品を1台に取り揃えたり、カップ機を併設することもできますので、複数の自動販売機の台数を集約することが可能で、消費電力量ともに総合的なCO₂排出量の削減を目指します。

缶・PETボトル飲料自動販売機の場合



自動販売機オペレーター業

全国に拠点をもち、独立系専業オペレーターとして、カップ式自動販売機を約52,000台、缶・PETボトル・紙パック飲料自動販売機を約23,000台、その他自動販売機を約1,800台展開しています。従業員様用としてオフィスや工場で、施設のご利用者様用として駅・高速道路SA・PA等で、生徒様や学生様用として学校で、さまざまな方々の憩いにお役立ていただいています。



フード事業

「スペチャリータ・ディ・カルネ・キッチャーノ」

ピステッカ(イタリア式炭火焼ステーキ)をはじめイタリアン・スタイルの肉料理に特化した、“メニューのない店”。他にはない個性的なダイニングです。素材は、こだわりの産地から厳選した“個性的な肉”を取り揃え、ドライエイジングで的確に熟成させたものを使用しています。



フレンチレストラン 「アピシウス」



1983年4月に有楽町・蚕糸会館にて創業し、昨年、おかげさまで30周年を迎えました。

古代ローマ時代の令名高き食通 Marks Gavius Apisius を店名の由来とするにふさわしく、“真実の正統派フランス料理”をご提供するため、そして、お客様に無二の感動を贈るために、その味を磨き続けています。

編集にあたって

アペックスでは、ステークホルダーの皆様との対話を大切に考え、2001年から「環境報告書」を、2013年度からは「サステナビリティレポート」を発行し、事業活動に伴う環境負荷の状況と負荷低減の取り組みについて、情報を開示してまいりました。

昨年、業界*で初めて間伐材紙カップの展開を始めたことから、カップ式自動販売機と森林資源との関係についてご紹介し、「日本の健全な森林づくり」「CO₂吸収源としての森林」「木材自給率」というものに注目してまいります。

弊社の環境保全への取り組み・社会とのかかわりを、本報告書を通して、一人でも多くのステークホルダーの皆様にご一読いただき、ご意見を頂戴し、今後の取り組みに活かしてまいりたいと考えております。

ぜひ、忌憚のないご意見、ご感想をお寄せくださいませうお願いします。

*日本自動販売機オペレーター業界

※「環境省 環境報告書ガイドライン(2012年度版)」を参考にしています。

※アペックスでは、本報告書印刷時の環境配慮として、「(コートなし)国産間伐材10%以上配合紙」「植物油インキ」「水なし印刷」を適用しています。これにより、国内の健全な森林の育成に貢献するとともに、CO₂排出量や印刷時の有害廃液の排出量削減、また、リサイクル時の廃棄物削減などに貢献しています。

報告対象範囲

株式会社アペックス

※グループ会社である株式会社アペックス西日本、日本ベントナー整備株式会社、株式会社名古屋フーズの取り組みも一部含まれます。

※ただし、「アピシウス」(フレンチレストラン)、「キッチンノ」(イタリアンレストラン)における取り組みは含みません。

報告対象期間

実績 2013年度(2013年4月1日~2014年3月31日)

※一部、直近のデータを含みます。

発行日

2014年7月

次回発行日

2015年7月発行予定

本報告書に関するご連絡先

株式会社アペックス 環境部

〒102-0074

東京都千代田区九段南2丁目3番14号 靖国九段南ビル6F

電話:03-3234-6421 FAX:03-3239-5805

レポート内容は弊社ホームページでもご覧いただけます。

<http://www.apex-co.co.jp>

CONTENTS

会社概要	1
経営理念	1
ごあいさつ	3
環境方針	4

特集 1

間伐材紙カップの展開 ~間伐材の活用~	5
---------------------	---

特集 2

サステナブルコーヒーの展開 ~生物多様性への取り組み~	7
--------------------------------	---

特集 3

アペックスの自動販売機・商品開発	9
------------------	---

環境への取り組み

事業活動における環境影響	11
環境保全活動の柱	12
持続可能な社会を目指して	13
環境マネジメント活動	19

社会とのかかわり

地域社会のために	21
----------	----

環境保全活動の歩み	22
-----------	----



アペックスは「Fun to Shareキャンペーン」に参加しています。

アペックスがこだわるのは 「最高の一杯、最高のひととき」。 お客様との価値の共有化を 大切にしていきたいと思います。



株式会社アペックス
代表取締役社長

及 吉 平

アペックスでは、昨年迎えた創立50周年を一つの区切りとして、次なる一步を踏み出すにあたり、「より良い品質、より良い自動販売機の稼動状態」というオペレーターの基本がいかに重要であるかという意識を新たにしました。そして、総合オペレーターとして、缶・PETボトル飲料自動販売機の存在はもちろん大切であり、お客様の需要も高いことを十分認識したうえで、今後ともカップ式自動販売機に基軸をおいて進んでいくことに変わりないという、私たちの「カップ式」に対するこだわりもより強く打ち出していきたいと考えております。

カップ式自動販売機にこだわる理由は、「カップ式でしか提供できない飲料の実現が可能なこと」と「環境面で優れていること」の2点です。

「カップ式でしか提供できない飲料の実現」の1つに、淹れたての本格コーヒーがあります。昨年以來、コンビニエンスストアのカウンターコーヒー需要が急拡大を見せております。缶コーヒーの味を否定するつもりはありませんが、これは、缶コーヒーとは一線を画するカップ式コーヒーの味が世間に広く評価された結果であると考えます。アペックスは、従来から「おいしいカップ式コーヒー」を強みにしてまいりましたが、この「コンビニコーヒー」の流れを「カップ式コーヒーのおいしさ覚醒現象」として追い風に、カップ式自動販売機をご利用いただく

皆様に、もっと身近な愛される存在となるべく努めてまいる所存です。また、コンビニエンスストアをはじめとする新しいチャンネルにおける、淹れたての本格コーヒーの販促にも力を入れていく所存です。私たちの「味へのこだわり」から、お客様との「おいしい」という価値の共有化を生み出していけると幸いです。

そして、私たちがカップ式にこだわるもう一つの理由が「環境」ですが、これからますます、時代は「環境」というキーワードを外して語れません。

2014年1月の米国の猛寒波による経済損失は、5千億円超という発表がありました。日本においても、東京では45年ぶりという積雪量を記録し、多くの市町村が孤立する等、大雪による大きな打撃を受けました。政府の発表によると、1都5県の農業被害だけでも621億円にのぼっていますから、物流が停止したことによる生産業や小売業、交通網のマヒ、事業活動の停滞等々を入れると、経済損失は莫大なものになります。気象庁によると、積雪量は全国的に減る傾向にあるものの、ひとたび雪が降ると大雪になる事例が目立ち始めているといえます。これは、地球温暖化が進んで気温が上がると、大気が抱えている水蒸気量(飽和水蒸気量)が増えるため、今後もこの傾向は増すものと思われます。気候変動のすべてが地球温暖化を原因とするものでないにせよ、その

基本理念

アベックスグループは、地球環境の保全が世界共通の課題であることを認識し、経営の最重要課題の一つに「地球環境との調和」を掲げ、自らの責任として、環境保全活動に最善を尽くします。

基本方針

アベックスグループは、自動販売機オペレーター業界の一員として、持続可能な低炭素社会を築くために豊かな自然との共存を目指します。

1. 事業活動、製品及びサービスが環境に与える側面を的確に捉え、環境マネジメントシステムを継続的に改善し、汚染の予防に努めます。
2. 環境側面に関係して適用可能な法的要求事項及びその他の受入れを決めた要求事項を順守するとともに、国、自治体等の施策に積極的に協力します。
3. 循環型社会の実現と省資源に向けて、事業活動のあらゆる側面で原材料・エネルギーなどの4R(リデュース、リユース、リサイクル、リカバー)を、適正且つ積極的に推進します。
4. 業務の改善に取り組み、総合的な環境保全活動に努めます。
5. 周辺地域の環境美化等に積極的に取り組み、地域社会に貢献します。
6. 環境方針は一般に開示します。

影響は、経済や食糧、疾病等、人類の活動基盤を脅かすものであることには変わりはありません。日本において、温室効果ガス削減という意識は、高いとは言えない状態が続いてはおりますが、昨年は日本の新たな温室効果ガス削減目標が決定しました。3.8%の削減目標のうち、約4分の3にあたる2.8%を森林吸収によって達成することとなっております。

折しも、アベックスでは、昨年、日本自動販売機オペレーター業界で初めて間伐材紙カップの使用を開始しました。日本の新目標が決まる少し前のことではありますが、かねてより間伐材を活用することが日本の森林を健全にし、森林は健全であってこそ、CO₂の吸収源や水源涵養機能等、森林本来がもつ機能を十分に発揮できるものという考えの下、推し進めてきたことでした。また、自動販売機オペレーターとして、紙カップのバリューチェーンを俯瞰し、時として関与することが、私たちの安心にもなり、お客様に自信をもっておすすめできるという考えでもありました。今後、この間伐材紙カップの普及、導入促進を推進することにより、この日本が掲げる目標達成に微力ながら貢献したいと考えております。そして、日本の健全な森林づくりの一助となり、木材自給率の向上にも貢献できれば幸いです。ただ、企業としての社会的責任を果たそうという自己満足な見地ではなく、

毎日お使いいただく身近なもので、わたしたちに共感し、ご賛同くださり、お客様と価値を共有していけるものになりうると考えております。

また、弊社のカップ式自動販売機が東日本大震災後の復興支援に貢献できたという実績と経験を活かした「災害対応型カップ自販機」の積極的提案を震災以降行ってまいりました。全国的に防災意識の高まっている昨今では、おかげさまで多くの自治体様、病院様、企業様等との支援協定の締結をさせていただくことができています。公助、自助だけでは埋めることのできないことを、共助というカタチでお手伝いできれば幸いです。今後ともこの積極的提案を行っていく所存です。

本報告書では、アベックスグループが目指している方向性や力を入れている取り組みを中心に、昨年度1年間の取り組みを報告しています。今後もステークホルダーの皆様のご期待やご要望を踏まえ、持続可能な低炭素社会の構築に貢献できるよう努めてまいりますので、率直なご意見、ご評価とともに、一層のご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2014年7月吉日

間伐材紙カップの展開 ～間伐材の活用～

1 業界初*間伐材紙カップの使用を開始

アベックスは、昨年、業界*で初めて間伐材紙カップの使用を開始しました。「カップ式自動販売機」からは、森林のイメージを抱く人は少ないかもしれませんが、この「カップ式自動販売機」というのは、森林の恩恵を実に多く受けているのです。

カップ式自動販売機は、1台1台が喫茶店営業許可を必要とする、いわば「お店」。お飲み物を調理するのに、水の存在は欠かせません。コーヒーを例に挙げると、機内で1杯ごとにコーヒー豆を挽き、機内で沸かした湯を使用してペーパーフィルターでドリップしているのです。アイスコーヒーの場合、機内で製氷した氷で清涼感を引き立てます。そして、出来立てのお飲み物を注ぐために必要なのが、紙カップという容器。水と紙カップは、ともに健全な森林資源の賜物です。お客様に美味しいお飲み物をご提供する業を営むアベックスにとって、「森林」は非常に重要なキーワードなのです。

日本の森林は約4割が人の手によって管理されている人工林で、スギやヒノキ、カラマツが主要な樹種になっています。人工林では、まず、苗木を植える「植栽」に始まり、そ



▲間伐材を活用した紙カップ

の後は、苗木の生長を妨げる雑草を刈り払う「下刈り」、生長過程で過密になった森林を適当な密度にするために抜き伐りする「間伐」などの作業が数十年にわたって実施され、ようやく健全な森林が育れます。

間伐は健全な森林を育む為には必須です。残った木々の1本1本の幹が太くなり、下層植生も豊かな森林に育ちます。太い幹の木は、しっかり根を張りますので、土壌の流出を防止し、風雪害などにも強くなります。おいしい水や美しい景観などの森林の恵みは、森林が健全であってこそもたらされるものであり、地域の安全で安心な暮らしのためにも間伐は必要なのです。

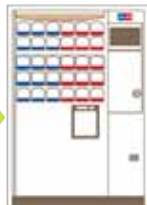
アベックスでは、間伐材を含む国産材100%を使用した紙カップを使うことで、健全な日本の森林づくりに貢献したいと考えています。

※日本自動販売機オペレーター業界

カップ式自動販売機と森林



森林資源の恩恵



健全な森林を育むサイクル



2 地球温暖化防止のために

日本の新たな温室効果ガス削減目標である「2005年度比で3.8%減」の3/4にあたる2.8%を、森林吸収で達成することとされています。この森林吸収量2.8%は、毎年52万haの間伐実施、木材利用の推進、森林の若返り化等による国内の森林整備によって確保することになっています。そのため、国では、間伐活動への支援や参加という直接的貢献とともに、間伐材製品の積極的な利用という間接的な貢献を、広く国民や企業等に呼びかけ、協力を求めています。

間伐材を活用した製品は、建材、オフィス家具等の木製品ばかりではありません。間伐材は、パルプとなって、紙製品にもなります。

アベックスでは、紙カップに間伐材を活用することで、国内の温暖化対策に貢献したいと考えています。



▲間伐材紙カップを使用した自動販売機の設置例

3 木材自給率向上のために

健全な森林を育むためには、「植える」→「育てる」→「収穫する」→「上手に使う」というサイクルが大切です。「上手に使う」ことが減れば、次第に「植える」ことも「育てる」こともなくなってきました。

ところが、いま、日本の人工林の大部分が手入れの必要な状態にあると言われています。その大きな原因は、社会や暮らしの



▲「平成25年度間伐・間伐材利用コンクール(製品づくり部門)」において、「間伐推進中央協議会会長賞」を受賞

変化に伴い、プラスチックや金属、そして外国からの輸入材の使用が増えたことにより、国産材の需要が伸び悩んでいることにあります。

平成23年度における日本の木材自給率は26.6%ですが、用材部門別に見てみると、中でも圧倒的に低いのがパルプ・チップ用であり、15.3%しかありません。「健全な森林のサイクル」をスムーズに進めるためには、主伐材や間伐材の利用を通じた「市場経済の循環」が不可欠であり、そのために果たす紙の役割は決して小さくありません。

日本では平成32年度には木材自給率を50%にまで引き上げる目標を立てており、アベックスでは国産材100%の紙カップの活用を通して木材自給率の向上にも貢献したいと考えています。

MEMO

森林の多面的機能と貨幣評価

日本は国土面積の約68%、つまり約3分の2を森林が占めており、先進国ではフィンランドやスウェーデンに次ぐ森林大国です。

森林は、①木材やきのこ等の林産物を算出する(物質生産機能)とともに、②四季折々の景観を人々に楽しませてくれるような文化機能、③人の心身にもたらすリフレッシュ効果を生む保健・レクリエーション機能、④大気の浄化作用等の快適環境形成機能、⑤地球温暖化の緩和や地球の気候の安定のための地球環境保全機能、⑥表面浸食防止や表層崩壊防止をはじめとする土砂災害防止・土壌保全機能、⑦洪水の緩和や水資源貯留、水量調節や水質浄化の水源涵養機能、⑧生物多様性保全、という実に多様な機能を有しています。

このような森林の有する多面的機能のうち、貨幣評価が可能な一部の物理的な機能を中心に算出し、単純に合計しても、その額は年に約70兆円にもなるといわれています。



サステナブルコーヒーの展開 ～生物多様性への取り組み～

コーヒーと生物多様性

アベックスでは、これから先もずっとおいしいコーヒーをお届けするために、展開するコーヒーにもサステナブルコーヒーを取り入れています。サステナブルコーヒーとは、サスティナビリティ(sustainability=持続可能性)に配慮したコーヒーのことで、現在のことだけでなく未来のことも考えた上で、自然環境や人々の生活を良い状態にたもつことを目指して生産/流通されたコーヒーの総称です。

日本のコーヒーの歴史を紐解けば、日本人自身の手によるわが国最初のコーヒー飲用体験記が太田蜀山人によって記されたのは1804年のこと。その後、日本に最初にコーヒーが輸入

されたのは明治10年のことで、その量は18トンだったといわれています。それから時を経て、日本はいまや40カ国以上の国からコーヒー豆を輸入し、消費量で見ても、アメリカ、ブラジル、ドイツに次ぐ世界4位となっています。それほどの消費をする国だからこそ、アベックスでは使用するコーヒーに無関心ではいられません。

毎日飲むコーヒーに「サスティナビリティ」という指標を加味して“選ぶ”ことで、できる環境保全。誰もが日常的にできる活動を推進するためにも、アベックスでは、今後ともサステナブルコーヒーの展開に取り組んでまいります。

工業品のようなイメージを抱きがちですが、コーヒーは農産物。だから、アベックスはサステナブルコーヒーの展開に取り組んでいます。



アベックスのサステナブルコーヒー

●「有機栽培生豆100%使用コロンビア」

有機JASマークの付された有機農産物とは

自然の力を最大限に利用した農業である有機農業によって生産された農産物のことで、次の要件を満たすことが必要です。

- 堆肥等で土作りを行い、種まきまたは植え付けの前2年以上(多年生作物*にあつては、最初の収穫前3年以上)、原則として化学肥料および農薬を使用していない田畑で栽培する。
- 栽培中も、原則として化学肥料および農薬は使用しない。
- 遺伝子組換え技術を使用しない。

*果樹、茶木、アスパラガスなど。コーヒーやカカオも多年生作物。



▲コーヒーの花



▲「有機栽培生豆100%使用コロンビア」のパッケージ(点線内に有機JASマーク)

●「イパネマ農園豆30%使用ブラジル」

- レインフォレスト・アライアンス認証のイパネマ農園で生産されたコーヒー豆を30%使用 -



レインフォレスト・アライアンスとは

地球環境保全のために熱帯雨林を維持することを目的に設立された国際的な非営利環境保護団体です。本部は米国ニューヨーク。

サステナブル・アグリカルチャー・ネットワーク(SAN)によって定められた、100項目に及ぶ社会的、環境的、経済的基準に

基づき、農園の認証を行っており、生物多様性及び労働者と地域共同体の権利と社会的境遇を守るために活動しています。レインフォレスト・アライアンスの基準を満たす農園や森林には、アメリカ、ヨーロッパ、アジアなどの企業や消費者に広く認知されつつある認証マークを使用する資格が与えられます。



▲イパネマ農園

コーヒーベルトとは

コーヒーの原産地は、赤道をはさんで北緯25度・南緯25度の間の熱帯地帯にある約70カ国に集約されており、このコーヒー栽培に適した気候、土壌をもつ地域のことを、「コーヒーベルト」や「コーヒーゾーン」と呼んでいます。そんな中でも、一般的には、平均気温が25度前後、年雨量が1,300～1,800mm、高度については、900メートルから2,000メートルの間の地域が、良いコーヒーをつくりだす条件と言われています。

コーヒーベルトは、コーヒーの産地であると同時に、多くが発展途上国であり、熱帯雨林をはじめとする生物多様性の宝庫でもあります。このことは、言い換えれば、コーヒー農園そのものが、生物多様性を維持する場でもあることとなります。



[topic]

コーヒー残渣リサイクル

レギュラーコーヒー残渣リサイクルへの取り組み

カップ式自動販売機のレギュラーコーヒーは、お客様からオーダーをいただくと(商品ボタン選択後)、その都度、コーヒー豆を挽き、ペーパーフィルターで濾しています。その後、コーヒー残渣は、自動販売機内で脱水し、減量化した状態で、機械内部に据え付けてある専用回収箱に捨てられます。

アベックスでは、このようなレギュラーコーヒー抽出後の残渣を、2008年度から、中部エリアで、肥料へとリサイクルする取り組みを始めました。専用回収箱から回収されたコーヒー残渣は、ペーパーフィルターを除去し、食品以外の異物がない状態にして、肥料製造元に出荷しています。アベックスのコーヒー残渣から生まれ変わった肥料は、製造元との契約農家やJAに

販売され、ご利用いただいています。2012年度からは取り組みエリアを拡大し、関東エリアにおいては熱回収(一部、売電)をし、東北エリアにおいては肥料へとリサイクルしています。

一方、関西エリアにおいても、レギュラーコーヒー抽出後の残渣を、2010年度から炭へとリサイクルする取り組みを実施しています。

これらの取り組みは今後も継続して行い、リサイクル率を高めていく予定です。それにとまならない、残渣回収エリアの拡大、回収の効率化に努めるとともに、食品リサイクルを通して、食品残渣の再生利用化を図り、食品廃棄物の削減に今後も貢献してまいります。

コーヒー残渣の流れ



▲“かすバケツ”内に回収されたコーヒー残渣



▲肥料化設備



▲製造された肥料



▲現地確認を実施



▲炭化設備



▲製造された炭



▲現地確認を実施



▲熱回収設備



▲送電線



▲現地確認を実施

アベックスの自動販売機・商品開発

① さらにエコベンダーを目指して

省エネルギーとCO₂排出量の削減

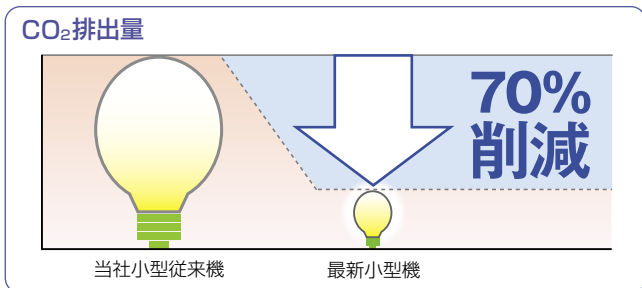
アベックスは、自社内に開発部門をもつ、唯一の自動販売機専業オペレーターです。独自の自動販売機開発を続けるアベックスは、オペレーターという立場を活かし、お客様にとって使い易くて安心してご利用いただけることはもちろん、製造から廃棄・リサイクルに至る全ライフサイクルにおける環境負荷低減に努めた、独自の自動販売機開発を続けています。

業界最省エネクラス カップ式自動販売機の開発

アベックスでは、グリーン購入法の基本方針に示される『判断の基準』に適合した機種の開発に努めております。特に、最新の機種においては、これまでの環境配慮機能に加え、最新の機能を搭載した、業界最省エネクラスのカップ式自動販売機の開発を実現させました。

大幅な年間消費電力量の削減

トップランナー基準値を大きく達成するとともに、CO₂の大幅削減に貢献します。



ピークシフト・ピークカット機能搭載

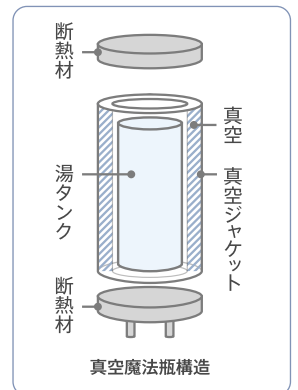
24時間内で任意の時間帯設定が可能ですので、ロケーションの状況に応じた組み合わせに対応できます。

熱を逃がさない魔法瓶構造

タイガー魔法瓶株式会社の技術を応用して、共同開発した「真空断熱ジャケット」を湯タンクに搭載。保温機能が格段に向上し、消費電力量の大幅削減を実現しました。

CO₂冷媒を採用

冷却システムにノンフロン冷媒(CO₂)を採用しました。ノンフロン冷媒だから、オゾン層破壊係数「0」、地球温暖化係数(GWP)「1」。地球温暖化防止にも、オゾン層保護にも貢献した、いま、最も環境に配慮した冷媒です。



スリープモード機能搭載

カップ式自動販売機は、食品衛生上、完全に全ての電力を断つことが難しいのですが、例えば、ご利用のない休日に、ほぼ完全停止に近い環境を作り出すことができる機能です。電照表示部の消灯および湯タンク運転・水槽運転・製氷運転の電力を最小限にして「販売不可」と表示し、設定した時間になると「販売中」に復帰する高効率なものです。

蛍光灯レス

標準出荷時は、蛍光灯レス。人感センサー連動の全面均一LED照明導光板を、オプションで準備しています。

MEMO

有事の際には心強いパートナーに！

飲料確保の手段として、多様性を持たせることは非常に重要です。アベックスでは、東日本大震災後の復興支援での経験を活かし、非常時に十分とはいえない自助・公助を補完する共助の1つの術として、災害対応型カップ自販機を提案しています。

さまざまな災害想定が発表されている昨今、今後の防災を見据えた対策として、関心が高まっており、地方自治体様や病院様、企業様等との「災害時における支援協力に関する協定書」締結が進んでいます。

標準メニュー



災害時メニュー



災害時には、レギュラーコーヒーの商品ボタンが、「お水」と「お湯」ボタンに早変わり。お薬の服用や、乳児のミルクをつくるのにお役立ていただけます。また、紙カップは衛生面でもすぐれもの。飲み口が自在に変型できるので乳児にもミルクを飲ませやすいのです。

2 商品づくりへのこだわり

アベックスのコーヒーへのこだわり

アベックスでは、自動販売機の開発とともに中身商品の開発も飲料原料メーカーと共同で行います。

レギュラーコーヒー豆は、自社のオリジナル自動販売機から一杯ずつ最適な味と香りでコーヒーを抽出できるよう、最良の豆を選定します。ブレンドやロースト度合など、細かい仕様をメーカーにオーダーし、その後、何度も試飲をくり返し、指定通りにできているか、ロットごとにチェックします。そして、アベックス基準を満たしたもののだけが、自動販売機で販売され、お客様のお手元に届くのです。

アベックスのコーヒーのおいしい理由

- ☑ 時代やお客様の嗜好に合わせたブレンド
- ☑ ホットとアイス、それぞれに最適な原料
- ☑ 当社オリジナルレシピ
- ☑ きめ細かな味調節機能付き
- ☑ 最適な湯量
- ☑ アイスコーヒーは氷入り
- ☑ カップミキシング機構で調理

“国産国消”へのこだわり

アベックスでは、コーヒーの他にバラエティ商品も数多く販売しています。コーヒー同様、くつろぎのひとつのための“最高の一杯”であるために、社会動向やお客様ニーズを的確に捉えなければならぬことは言うまでもありません。

近年では、食の安全・安心への関心の高まり、また、環境意識の高まりから、“地産地消”あるいは“国産国消”への意識が年々強くなっている背景を受け、バラエティ商品にも国産農産物を使用したものにこだわりながら商品づくりを行っています。



※岩手県産山ぶどう使用の「幸せのぶどう」、高知産ショウガエキス・国産レモン果汁使用の「ジンジャーレモン」、紀州産南高梅を使用した「梅」など、原材料にもこだわります。

MEMO

水へのこだわり

コーヒーや、清涼飲料水を製造するのに、水は欠かせません。缶やPETボトルという容器に予め充填された飲料も同じことです。とりわけ、その場でその都度飲み物をつくるカップ式自動販売機は、自動販売機内がいわば飲料製造工場や喫茶店と同様ですから、アベックスは「その場の水」にこだわります。

そこで、アベックスでは、使用する水の状況に応じて、最適な水フィルターを使い分けています。また、同じ種類のフィルターの中でも、より高レベルのものを使用し、安全・安心はもとより、飲み物の「おいしさ」を大切にしています。

フィルターについて

- カーボンフィルターは残留塩素や懸濁物を除去します。
- 除菌フィルターは残留塩素、微粒子、ウイルスやバクテリアを除去します。

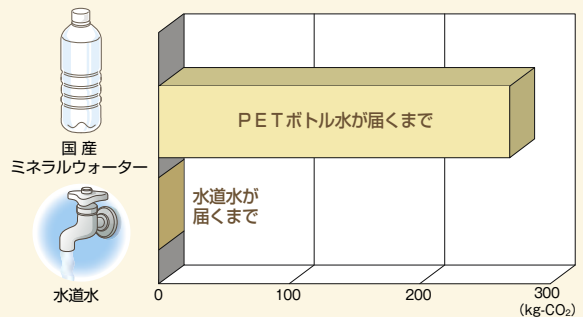
また、アベックスでは、販売サービス部門に携わる社員の知識と技能の向上を図るため、国家検定「自動販売機調整技能士」の資格の取得を奨励し、社内の技能評価の基準として採用しています。

等級	特級	1級	2級
人数	33名	335名	399名

資料

ライフサイクルにおけるCO₂排出量比較

※「1m³の水(500ml入りPETボトル2,000本相当)」のライフサイクル



※算出にあたっては、名古屋市上下水道局環境報告書、ホームページを参考にしています。

※算出にあたっては、PETボトルリサイクル推進協議会ホームページ、「PETボトルのインベントリ分析」(PETボトル協議会)、『身近な地球温暖化対策(家庭のできる10の取り組み)』(環境省地球環境局監修環境会計簿)を参考にしています。

アペックスの環境負荷

環境負荷低減のために

アペックスでは、事業活動にともなって発生する環境負荷の継続的な低減を図るために、事業活動において使用している資源やエネルギーの使用量、空き容器のリサイクル量と廃棄物量等を集計、分析しています。

アペックスでは、お客様のもとから回収した紙カップや缶・PETボトル等の空き容器のマテリアルリサイクル・サーマルリサイクルを実施しています。また、レギュラーコーヒー抽出にともない発生する残渣については、2008年度に肥料化リサイクルを開始。その後、順次リサイクルエリアを拡大し、肥料化の他に、炭化や熱回収も行っております。

エネルギー起源によるCO₂排出量については、より消費電力量の小さい自動販売機の開発や、お客様への適正台数・適正配置の設置提案を行ったり、業務全般にわたる改善にも積極的に取り組んでいます。

また、紙カップ原紙には間伐材や合法木材を使用したり、コーヒー

豆の調達には生物多様性の保全も視野に入れる等、エシカル調達に配慮しています。アペックスでは、今後一層バリューチェーン全体を俯瞰し、最適なものになっているかを考えながら活動してまいります。

MEMO

エシカル調達

グリーン調達に加えて、環境問題や人権問題など様々な側面を調査した上で調達することをいいます。

バリューチェーン

米ハーバード大学のマイケル・ポーター教授が、著書『競争優位の戦略』(1985年発表)の中で提唱した概念。日本では、「(付加)価値連鎖」と表現されます。サプライチェーンが「モノ」の流れを意味するのに対し、バリューチェーンは商品やサービスの「価値」に着目しています。

事業活動における環境負荷

INPUT



エネルギー

電気：334万kwh
ガス：36km³
灯油：10kℓ



水

19km³

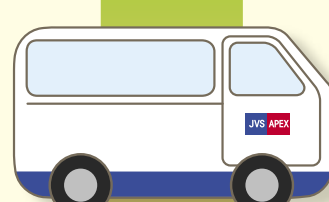


事務所



エネルギー

ガソリン：1,250kℓ
軽油：2,040kℓ
L P G：0.5kℓ



車両

OUTPUT



CO₂
2.1kt



配水
19km³



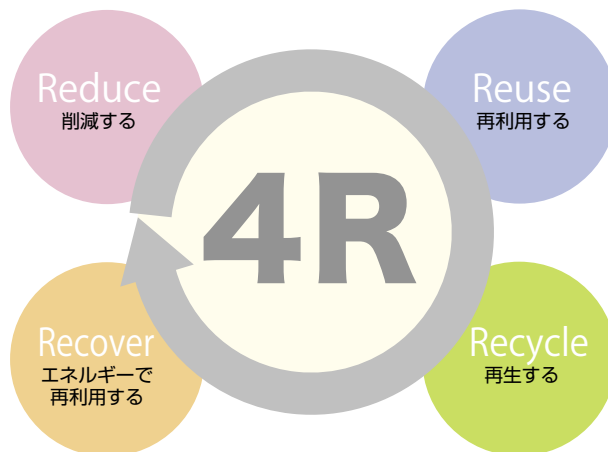
CO₂
8.2kt

アペックスが推進する4つの「R」

4Rの推進を環境方針でコミットメント

アペックスでは、1996年に環境部を設部して以来、一般的な「3R」（「Reduce-発生物を抑制する、削減する-」「Reuse-再利用する-」「Recycle-再生する-」）に、「Recover-エネルギーで再利用する-」を加えた「4R」を、環境保全活動の中核として活動しています。4つめの「R（Recover）」とは、アペックスの取り組みの特長の1つで、自動販売機から排出される可燃廃棄物をRPFという固形燃料にし、エネルギーとして再利用するという活動（詳細は、13頁～16頁をご参照ください）です。

アペックスでは、「4R」を活動の柱としながら、今後も、持続可能な循環型社会、低炭素社会構築に努めてまいります。



コーヒー豆

サステナブルコーヒーの調達に努めています。

エネルギー
電気: 158百万kwh

水
91km³

自動販売機

CO₂
90.4千t

配水
11.4km³

コーヒー残渣

肥料化: 114t 熱回収: 24t
炭化: 61.3t

紙カップ

間伐材や合法木材を使用しています。

容器

紙カップ: 2.8千t
缶等: 4.0千t

容器

一般廃棄物
2.1千t

リサイクル

紙カップ: 1.3千t
缶等: 3.0千t

循環型社会の構築のために

資源の循環利用

アベックスでは、回収した紙カップのマテリアルリサイクルを1998年から行っています。また、2001年からは「可燃廃棄物」をリサイクルの対象物としたサーマルリサイクルにも取り組んでいます。

容器包装類、プラスチック類の廃棄物を回収からリサイクルまで責任を持って一括管理することにより廃棄物の削減に努め、循環型社会構築に貢献しています。

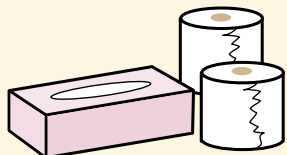
アベックスのリサイクルシステム



MEMO

マテリアルリサイクル

廃棄物を原料として再利用すること。同義語に「材料再生」「再資源化」等があります。具体的には、使用済み製品や生産工程から出るごみなどを回収し、利用しやすいように処理して、新しい製品の材料もしくは原料として使うことを指します。アベックスでは、使用済み紙カップを回収して衛生紙(トイレトペーパーやボックスティッシュ等)にリサイクルしています。



サーマルリサイクル

廃棄物を単に焼却処理するだけではなく、焼却の際に発生するエネルギーを回収・利用すること。サーマルリサイクルには、油化、ガス化の他に、ごみ焼却熱利用、ごみ焼却発電、セメントキルン(焼成窯)原燃料化、廃棄物固形燃料(RPFやRDF)などがあります。アベックスでは、自動販売機を通して排出される可燃廃棄物をRPFにしています。

RPF(あーるぴーえふ)※

廃棄物固形燃料の1つ。アベックスでは、使用済み紙カップや紙パックなど、主に紙とプラスチックを破砕・圧縮して作っています。

※Refuse Paper&Plastic Fuelの略

アペックスのマテリアルリサイクル ～紙から紙へ～

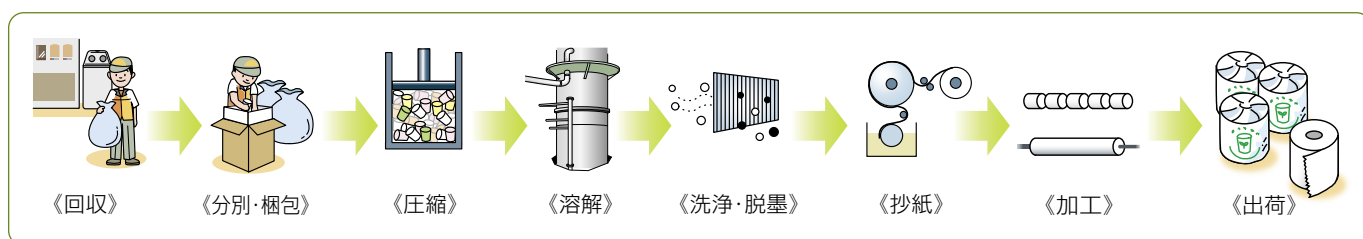
アペックスでは、廃棄物の削減、森林資源の保護、生物多様性の保全や、水資源・土壌の保護を地球環境問題の重要な課題であると考え、その取り組みの1つとして、紙資源の有効活用をしています。

アペックスでは、1997年、当時はリサイクルできないものの1つと言われていた紙カップのマテリアルリサイクルシステ

ムを確立。翌年の1998年より、回収した紙カップを衛生紙（トイレトペーパーやボックスティッシュ等）へリサイクルしています。

2013年度の実績

2013年度は、約100tの使用済み紙カップ等のマテリアルリサイクルを行いました。



アペックスのサーマルリサイクル ～紙・廃プラからエネルギーへ～

2001年3月、自動販売機を通して排出されるすべての可燃廃棄物のリサイクルを目指し、愛知県大府市において「車輻搭載型固形燃料化設備」を保有し、中部地区の事業所から発生する可燃廃棄物の固形燃料(RPF)化を実施しました。そして、2004年10月に開設した[中部リサイクルセンター]では、産業廃棄物処分業許可を取得し、アペックスが運営する自動販売機を通して排出されるものはもとより、社外から発生する廃プラ類をも受け入れ、固形燃料化し、廃棄物の削減に努めています。

製造したRPFは、検査機関に持ち込み、重金属や塩素等の項目について成分分析を行っています。

アペックスのRPFは、家庭系一般廃棄物から製造される生ゴミ・水分を主体としたRDFとは異なり、原料が安定しており、塩素や水分がほとんど含まれていないので、安心してご使用いただける固形燃料です。

2013年度の実績

2013年度は、約1,209tの使用済み紙カップ等のサーマルリサイクル(余熱利用等含む)を行いました。

	アペックスのRPF	RDF
発熱量(cal/g)	6,000程度	4,000程度
塩素分(%)	0.2未満	2.0未満

※中部リサイクルセンターのRPF化ラインで製造されたRPFの成分と一般的なRDFを比較

リサイクルの実績と今後の課題

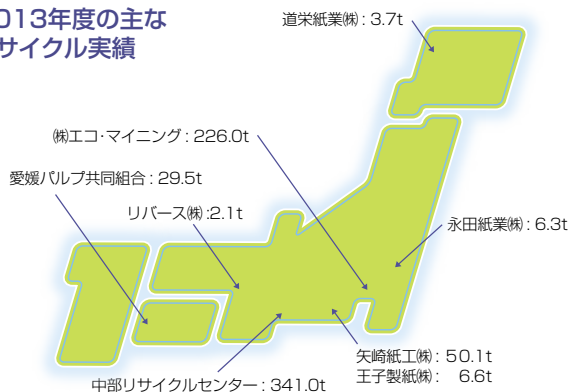
今後のリサイクル展開計画と課題

リサイクルを実施するうえで、運送効率をあげることは非常に重要な課題です。アペックスでは、まだ改善の余地があると考えており、今後も、新たな回収便ルートの確立や地元協力会社との提携等の検討を重ねることにより、輸送距離短縮や効率化による環境負荷低減を図り、リサイクルの効率化を目指します。

今後も、それぞれのリサイクルの特長を活かしつつ、より環境負荷の低いサーマルリサイクルを中心とした、紙カップリサイクルを推進していく予定です。



2013年度の主なリサイクル実績



循環型社会の構築のために

資源循環への取り組み

アベックスでは、循環型社会構築のために、回収した可燃廃棄物をリサイクルするだけでなく、自主的に拡大生産者責任を課し、リサイクル製品の販売を実施し、資源の循環に努めています。

衛生紙(トイレトーパーやボックスティッシュ等)

学校や企業などの自動販売機設置先であるお客様にご利用いただいています。

RPF

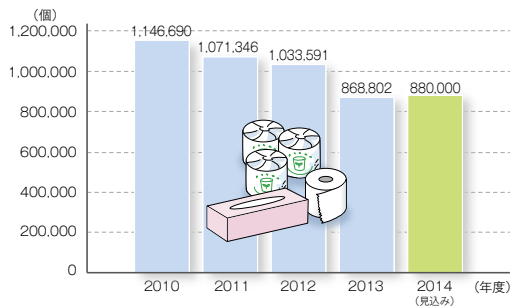
石炭の代替燃料として使用されています。

※RPF1tは、石炭0.83tに相当します。

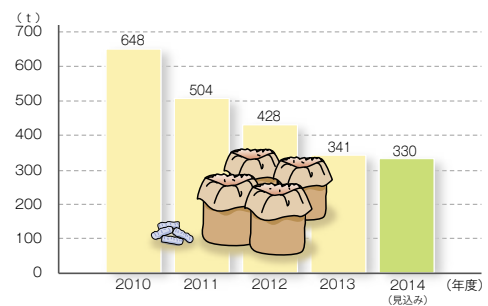
資源化物

種類毎にメーカーに販売し、再商品化されています。

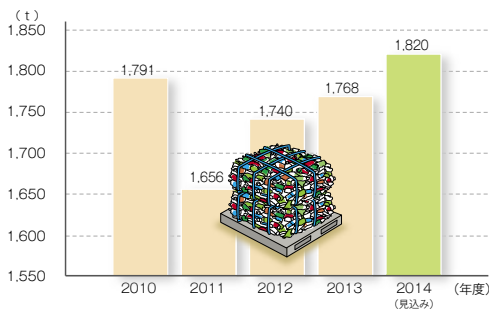
衛生紙販売量



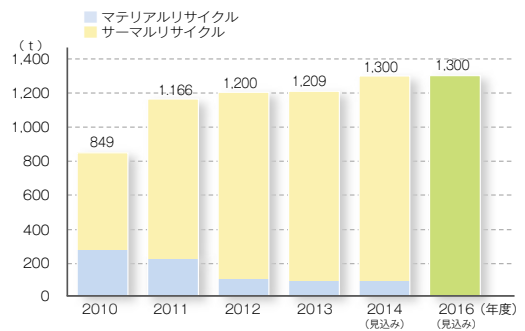
RPF販売量



資源化物販売量



使用済み紙カップリサイクル量



MEMO

RPFについて

- 化石燃料の代替となりますので、資源枯渇防止に役立ちます。
- 化石燃料と同等の熱量があります。
- 灰分率は一般的に3~7%*。石炭は11~15%程度なので、使用後の灰の埋立て処分量が削減できます。
- コンパクトな形状でハンドリング性に優れています。
- 歩留りが良いうえ、素材段階からリサイクル段階に要するエネルギーの小さい燃料です。
- 紙カップと廃プラの分別の必要がないため、作業効率にも優れます。

- 石炭(例 輸入一般炭)に対して、燃焼時に同一熱量回収を行う過程で石炭よりも約33%のCO₂排出量削減*になり、地球温暖化防止に貢献します。

*日本RPF工業会調べ



中部リサイクルセンター

アベックスでは、2004年10月、RPF(固形燃料)製造の拡大効率化と、缶・PETボトルの自社内リサイクルの体制を整えることを目的に、愛知県東海市に[中部リサイクルセンター]を開設しました。

同センターではRPF化ラインと資源化ラインの2つのラインをもち、廃棄物の削減と循環型社会構築に貢献するため、飲料自動販売機を通して排出される、使用済みのすべての容器包装類(紙カップ、原料袋、缶、ビン、PETボトルなど)のリサイクルを自社で責任を持って行っています。



▲緊急事態対応訓練



▲中部リサイクルセンター

固形燃料 (RPF) 化ライン

固形燃料化ラインでは、自社の自動販売機から排出される紙カップ、原料袋などの容器包装類、廃プラスチック類(社外から受け入れたものを含む)を、破碎・圧縮し、直径15mm・長さ50mm程度のクレヨン状に加工します。製造した固形燃料は、検査機関に持ち込み、高位発熱量、灰分、水分、硫黄、塩素の5項目について成分分析を行っています。

石炭の代替として、乾燥用加熱炉の燃料やボイラーの燃料として使用されます。



[固形燃料化ライン]

- 取り扱い品目
紙カップ・原料袋・紙パック・紙(複合紙)・
廃プラスチック類等(※塩化ビニール不可)
- 処理能力: 3.6t/日

資源化ライン

資源化ラインでは、主に自動販売機を通して排出された、空きスチール缶・アルミ缶・PETボトル・ビンを選別し、スチール缶は35kg、アルミ缶は7kgのブロックにプレスします。また、PETボトルとビンは手作業で分別を行います。選別・圧縮された空容器は、各メーカーに出荷後、再商品化されます。



[資源化ライン]

- 取り扱い品目
スチール缶・アルミ缶・
PETボトル・ビン

※PETボトルのベラー機

- 処理能力: 12.0t/日
- 処理能力: 4.0t/日



日本ベンダー整備株式会社の取り組み

自動販売機の長寿命化

アペックスは、1966年、オペレーターとして初めて自動販売機の整備を開始。その後、整備部門は、1976年、日本ベンダー整備株式会社として独立しました。

アペックスでは、機械メーカーから購入し、お客様先に設置した自動販売機を、当社規程に基づき、日本ベンダー整備株式会社で計画的に整備を行っています。この計画的な整備の実施により、長寿命化を図り、省資源化、廃棄物の削減に努めています。



▲全国から整備のために集まった自動販売機

整備と環境負荷低減

日本ベンダー整備株式会社では、稼働時の故障や整備時の改良点等について、アペックスと情報の共有化を図りながら整備を実施しています。それらの情報は、次の新機種開発にも活用され、自動販売機の進化に大いに役立てられています。

また、単なる整備ではなく、デザイン変更や新機能搭載等、積極的な改造や修理等も行っています。そして、既存の自動販売機の内部で使用している保温材や断熱材からホース1本に至るまで、1点1点の部材の材質を見直すこと等により、どれぐらいの環境負荷低減を図ることができるのか検証を続けながら、さらなる環境負荷低減を実現させるべく取り組みを行っています。

2001年6月に開設したJVRリサイクルセンターでは、廃棄する自動販売機から、社内基準に基づいた再生可能部品の回収を行っています。回収した部品は、日本ベンダー整備株式会社で再生し、自動販売機の整備や修理に使用しています。



▲(整備)分解工程

2013年度実績

2013年度は、3,935台の自動販売機の整備を行いました。

円滑で継続的なISO 14001 活動のために

日本ベンダー整備株式会社は、開発部の原料加工センターとともに、2000年12月、ISO 14001を認証取得しました。自動販売機の整備工場と原料の加工センターという、オペレーター業務とは異なる業務内容であることから、適用を受ける法令



等もアペックスとは異なり、それぞれの厳しい基準を順守するために独自の活動を行っています。

活動をパソコンで一元管理し、文書管理や活動の進捗管理をはじめ、順守評価や不適合是正報告の管理や有資格者の管理・教育に至るまで、誰もがいつでも確認できるシステムで運用管理しています。また、行政等への届出や許可証の有効期限が近づく警告が表示されたり、万一滞っている活動や報告がある場合にも警告で知らせ、注意を喚起します。

日本ベンダー整備株式会社では、この一元管理で、活動のクオリティの均一化を図りながら、今後も活動と管理の充実に努めてまいります。

新しいドリンクシステムへの取り組み

アベックスでは、厳選した原料豆を使用し、こだわりの機械で抽出する「おいしいコーヒー」を、もっといろいろな場面でお届けするために、「M-one café Coffee System(エムワン カフェ コーヒーシステム)」と「POD Drink System(ポッドドリンクシステム)」を展開しています。

カップ式自動販売機で培ったコーヒー豆の味と香りを引き立てる術を知る、アベックスならではの新しいドリンクシステムです。

M-one café Coffee System (エムワン カフェ コーヒーシステム)

アベックス独自の味覚基準、品質基準に則り、コーヒー豆の選定からブレンド、ロースト、そして最適なレシピづくりを行っています。また、常に安定した品質と味を確実に再現するために、独創的なアイデアと最新技術を搭載したコーヒーマシンを開発しました。

マシンと、マシンに最適にマッチングするコーヒー豆の供給、レシピ、調理プログラム、メンテナンスの技術サポートまで、M-one café Coffee Systemはトータルサービスを提供いたします。



●“おいしさ機能”を満載

レギュラーコーヒーとエスプレッソコーヒーは豆の挽き方も抽出方法も異なるコーヒー。そこで、マシンには、コーヒールーワーもミルもそれぞれ専用のものを搭載しています。だから、カプチーノやカフェラテも、ボタン操作1つで熟練のバリスタ並みのコーヒーがどなたでもおいしく作れます。



▲マシンは、斬新なシースルーデザイン

POD Drink System (ポッドドリンクシステム)

ドリンクは、その都度、一つずつ窒素充填した個包装のカフェポッドからカップに抽出するので、いつでも淹れたて。本格珈琲の深い香りと味がお楽しみいただけます。また、アイスコーヒーも簡単に作れる機種のご用意もあります。

そして、環境配慮も特長の1つ。機械の仕組みや使用方法がシンプルで、しかも、消費電力や設置スペースもコンパクト。

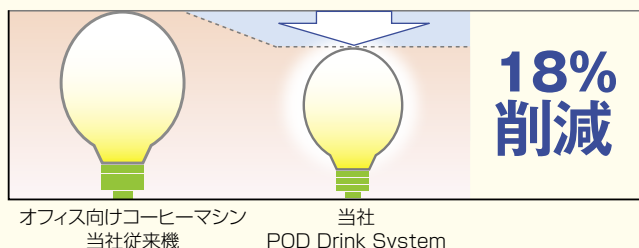


▲スタイリッシュなマシン

機械の製造過程、輸送等の各工程においても、環境負荷低減に努めました。

しかも、コーヒー残渣が出ませんので、器具を洗う手間がかかりません。いつでも清潔、衛生的です。

●さらなる省エネを実現した消費電力量



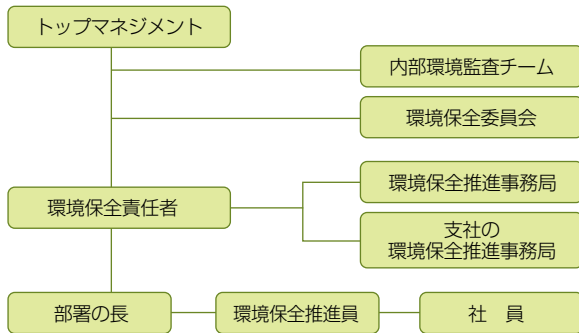
環境マネジメントシステム

アベックスの環境マネジメントシステム

ISO 14001をグループで認証取得

アベックスでは、全事業所およびグループで、環境マネジメントシステムの国際規格 ISO 14001を認証取得し、「PDCAサイクル」を徹底し、継続的な環境負荷低減活動に努めています。

アベックスの環境推進組織図



社内環境監査システム

アベックスでは、社内規程に基づき、毎年全サイトで社内環境監査を実施し、環境保全活動の妥当性を監視しています。

2013年度の監査実績

2013年度は、125拠点において、部門固有のテーマに沿って実施。その結果、[観察]として137件、[軽微な不適合]として51件、改善指摘事項が発見され、[重大な不適合]は発見されませんでした。指摘事項は、社内規程に基づき、速やかに是正処置に取り組み、各監査員が是正内容の確認を行いました。



▲社内環境監査(中央営業所)

環境関連コンプライアンスへの対応

アベックスでは、適用を受ける法令等の動向を確実に把握し、順守すべき法令等を登録表にまとめています。それに基づき、産業廃棄物処理委託業者の現地確認を行うほか、年3回全部署でチェックシートを用いた法令等の順守状況の点検を実施したり、行政のHPを活用した情報収集等を適宜行っています。

2013年度の順守状況

2013年度、環境関連法規等、適用を受ける法令等に関する違反事項はありませんでした。

環境関連の苦情・要望・問い合わせとその対策

2013年度、環境関連の要望・問い合わせは、環境保全活動

に関する調査・協力依頼および問い合わせ等が31件、夏場におけるゴミ置き場の異臭や騒音等の苦情が3件ありました。これらすべての依頼および問い合わせ、苦情について、速やかに対応するとともに、苦情については、再発防止に努めています。



▲産廃処理委託業者の現地確認(鳥取営業所)

▲産廃処理委託業者の現地確認(福岡支店)

社員への環境教育

アベックスでは、環境教育の重要性・必要性を重んじ、ISO 14001規格に則り、全事業所において、環境方針や環境目的・目標に関する教育や「理解度テスト」を実施しています。



▲新入社員研修

▲営業部セミナーにおける環境教育

対象	教育名
全社員	環境一般教育
新入社員	新入社員教育(環境教育有り)
車輛運転者	エコドライブ運転テクニック教育
力量業務従事者	環境特別教育
支社長・部署の長	管理者教育(環境教育有り)
内部環境監査員	内部環境監査員教育

環境計画の概要と評価

アベックスでは、持続可能な社会の実現を目指し、環境方針に基づき、継続的な環境保全活動を行っています。2013年度も、以下のような、具体的な環境目的・目標を設定し、達成するために取り組んでまいりました。

環境影響評価の結果、環境負荷が大きいために環境評価点の高い[車輛給油量削減]や[紙カップリサイクル率向上]については、環境指標と経営指標との向きを揃え、今後とも業務改善の一環として取り組んでまいります。

環境目的	2013年度環境目標	実績	評価*
地球温暖化防止・資源枯渇防止・業務改善	【労働分配率改善・化石燃料の有効活用】(全部署) 1カップ(本)あたり給油量(原単位)削減:12年度比1%削減	達成率: 76.0%	×
廃棄物削減・循環型社会構築	【紙カップリサイクル率向上】(事業統括本部) 年間紙カップリサイクル率:55.6%	達成率:124.3%	○
社会貢献	【一部署一役運動】(全部署で事務所周辺の清掃活動等を実施) 頻度:2.0回/月(80%の部署で達成)	達成率:108.5%	○
拠点の業務改善	【自動販売機のトラブル件数削減】(品質管理部) トラブル発生件数削減:05年比16%	達成率:127.8%	○
コスト削減	【廃棄物処理代の削減】(環境部) 廃棄物処理代削減:12年度比3,000千円	達成率:238.0%	○
環境対応型自動販売機開発	【環境対応型自動販売機の開発】(業務セクション) 進捗管理:100%	達成率:100.0%	○
業務改善	【台数予算の達成】(営業企画部) 獲得台数:予算台数	達成率:116.8%	○
地球温暖化防止・資源枯渇防止	【省エネルギーの推進】(中部リサイクルセンター) 処理量当たりのCO ₂ 排出量削減:08年度比20%	達成率:117.5%	○
業務改善	【利益改善】(経営企画室 フード部門) 売上:予算達成	達成率:110.9%	○
業務改善	【車両事故件数の低減】(総務部) 年間車両事故件数削減:12年比20%	達成率: 79.9%	×
グリーン調達	【グリーン購入法特定調達物品の調達の推進】(総務部) グリーン品目数割合:総購入点数に対するグリーン品目数の割合各月84%の継続	達成率:100.5%	○

*評価について ○:達成 ×:未達成

環境コスト

環境保全活動に伴う全コスト (百万円)			
会計区分		費用	効果
サービス活動により生じるコスト	リサイクルコスト	69.6	185.1 ^{*1}
	廃棄物処理費	177.9	—
	その他環境整備費	70.8	—
管理活動におけるコスト	ISO維持費・教育費等	16.9	70.4 ^{*2}
社会活動におけるコスト	サステナビリティレポート作成等	1.2	—
合計		336.5	255.5

*1 再生品販売費(衛生紙、RPF、資源化物、その他)

*2 2000年(全社 ISO14001 認証取得活動開始)と比較した光熱費・帳票代等の削減費用

CSR活動・地域コミュニケーション活動

一部署一役運動

アベックスでは、「私たちは、地域社会に貢献し信頼を集めます。」を行動宣言の一つに掲げ、地域社会との交流・社会貢献活動に力を注いでいます。

2013年度は、アベックスが経営する東京・有楽町のフレンチレストラン「アピシウス」において、2011年から復興支援を目的に開始した「チャリティーカレーフェア」を4月・11月に行った他、事務所周辺の定期清掃、市町村の社会福祉協議会へのリ

サイクルトイレ紙の寄託、企業・NPO法人・自治体等が主催する「環境展」や「防災フェア」への参加・支援、使用済みインクカートリッジの専用引取回収サービスを通じた環境保全活動への参加等を行いました。

今後も、いま自分たちにできることは何なのかを見つめつつ、微力ながらもできる限り積極的な地域社会との交流、社会貢献を図ってまいります。



被災地を支援するため、フレンチレストランでチャリティーカレーを開催しました。



▲フレンチレストラン「アピシウス」でのチャリティーカレー

お取引様の環境展や防災フェアへの参加・支援を行いました。



▲お取引様環境展（津営業所）



▲防災フェアに参加。アベックスの災害対応型自販機は、来場者の多くの関心を引きました。

地域清掃や、「こども110ばんのいえ」としても地域社会のお役に立っています。



▲営業所は「こども110ばんのいえ」（高知営業所）



▲定期的な清掃活動（東京本社）

使用済みのインクカートリッジで環境保全活動に貢献します。

使用済みのインクカートリッジをメーカーの専用回収サービスを利用して回収。そのサービスを利用することで、カートリッジの回収量に応じて貯まるポイントは環境団体（公益法人オイスカ・公益法人日本自然環境協会）に寄付し、環境保全活動にお役立ていただいています。



リサイクル工場見学会の開催

アベックスでは、弊社のリサイクルシステムをご確認いただくため、お客様のご要望に合わせて、富士市のストックヤード及び製紙工場、中部リサイクルセンター、日本バンダー整備株式会社等のご案内をしています。



▲中部リサイクルセンター



▲古紙ストックヤード

環境保全活動の歩み

国内外の主な動き	年度	アベックスグループの動き
	1966年	・自動販売機の整備を開始
	1973年	・自動販売機の整備工場開設
	1976年	・自動販売機整備部門を「日本ベンダー整備株式会社」として独立
	1981年	・カップ式自動販売機「APEX 2400」発表
	1986年	・カップ式自動販売機「APEX 5000」発表
	1993年	・オフィス向けドリンクシステム「フラビア®S220」発表
	1996年	・環境部を設立
	1997年	・デポジット式紙カップ専用回収機「カップエコシット™」発表
	1998年	・非木材紙カップの使用開始
		・使用済み紙カップのマテリアルリサイクル開始
		・カップ式自動販売機「APEX 120RV」発表 <small>※業界初・映像情報装置搭載</small>
		・ISO14001認証取得(東京本社・開発部・横浜南SC・厚木SC)
	1999年	・グループ会社日本ベンダー整備株式会社にてISO14001認証取得
	2000年	・愛知県で移動式固形燃料化設備を導入 - サーマルリサイクルを開始 -
	2001年	・カップ式自動販売機「APEX 120QV」発表 <small>※カップミキシング機構搭載、世界最速クイックベンダー</small>
		・「有機栽培生豆100%使用コロンビア」発売開始
		・JVRリサイクルセンター設立
		・「環境報告書」発行開始
		・全社(101サイト)にてISO14001認証取得
	2002年	
	2003年	・新リサイクルプラント建設企画
	2004年	・中部リサイクルセンター設立 操業開始
	2005年	・カップ式自動販売機「APEX 130REC(T)」発表 <small>※大型タッチパネル搭載</small>
		・中部リサイクルセンター 全ライン操業
		・「ウェステック大賞2005」において事業活動部門賞受賞
		・グループ会社株式会社名古屋フーズにてISO14001認証取得
		・中部リサイクルセンター 拡張工事
		・「資源循環技術・システム表彰」において会長賞受賞
		・バイオガソリンのテスト使用を開始
		・「全国高等学校校定時制通信制教育六十年記念式典」において文部科学大臣賞を受賞
	2006年	・「VENDEX JAPAN 2008」に出展
		・中部エリアで、レギュラーコーヒー残渣のリサイクル(肥料化)開始
		・カップ式自動販売機「APEX 120QREC」発表
		・カップ式自動販売機「APEX 50RB」発表
		・使用済みフラビア®パックの固形燃料化を開始
		・ISO14001認証取得から10年が経ち、「10年継続賞」受賞
		・株式会社アベックス西日本設立
		・カップ式自動販売機「APEX 100QRC」発表
		・コカ・コーラウエスト株式会社と資本・業務提携契約締結
		・関西エリアで、レギュラーコーヒー残渣のリサイクル(炭化)開始
		・レギュラーコーヒー「ブラジルブレンド」発売開始
	2007年	
	2008年	
	2009年	
	2010年	
	2011年	
	2012年	
	2013年	
	2014年	



Sustainability Report 2014

環境・社会報告書

お問い合わせ



アベックスグループは、環境マネジメントシステムの国際規格ISO14001:2004を認証取得し、環境保全活動に積極的に取り組んでいます。

<http://www.apex-co.co.jp>



国産間伐材10%以上配合紙



植物油インキを使用しています。